

楊貴妃の素性について

岡本 午 一

唐の玄宗の寵妃楊氏すなはち楊貴妃については、白樂天の名作長恨歌や、陳鴻の長恨歌傳等によつて、古來頗る人口に膾炙されてゐて、今更改めて喋々するを要しない。然しながら通常流布されてゐるのは、殆んど彼女が玄宗の後宮に入つたあとの話であつて、それ以前は餘り知られてゐない。況や彼女の素性に關しては、なほ判然としないものが多い様に思はれるし、また精確なことを知ることも難しいが、思ひ付として或るひはかうも考へられはしないかと、こゝに私見を述べて大方の御高教を希ひたいと思ふのである。

彼女玉環は、^①宏農華陰(陝西省華縣)の人で、蜀州(四川省崇慶縣)司戸參軍であつた楊元琰の女であつて、幼にして孤となり、叔父の河南府士曹參軍楊元璣に養はれ、長じて玄宗の第十八子壽王瑁の邸に在つたが、

玄宗が最愛の武惠妃を失つたときに、求められて入内し、貴妃となり、帝との間に後世に残る纏綿たる情艶繪卷を繰り擡げたのであると傳へられてゐる。

此の通りであれば、何等疑問はないが、なほ一應これらの事柄に就いて穿鑿して見る必要がある。さて彼女の戸籍調査を始めるにあつて、先づ父元琰とはどんな人物であらうか調べることにする。元琰を傳へるものとしては、正史の彼女の傳の中に、

玄宗貴妃楊氏。隋末梁郡通守汪四世孫。徙籍蒲州。遂爲永樂人。幼孤養叔父家。(唐書后妃傳上)

或るひは

玄宗楊貴妃。高祖令本金州刺史。父玄琰蜀州司戸。妃早孤。養於叔父河南府士曹元璣。(舊唐書后妃傳)

とあり、宋の樂史の太眞外傳には

楊貴妃。小字玉環。宏農華陰人也。後徙居蒲州永樂之獨頭村。高祖令本金州刺史。父元琰蜀州司戶。貴妃生於蜀。嘗墜池中。後人呼爲落妃池。池在導江縣前。妃早孤。養於叔父河南府士曹元璵家。

といひ、前掲の長恨歌傳の中にも、玄宗が美女を需めた時に、宦官高力士に搜索せしめて、

詔高力士潛搜外宮。得宏農楊元琰女于壽邸。

とある如く、元琰は、はじめ宏農華陰の人であつて、

後に徙つて蒲州永樂(山西省永濟縣)に居を構へたが、

蜀州(四川省崇慶縣)に赴任してゐる間に、彼女が生れたのである。元琰については、此の位しか判らない。

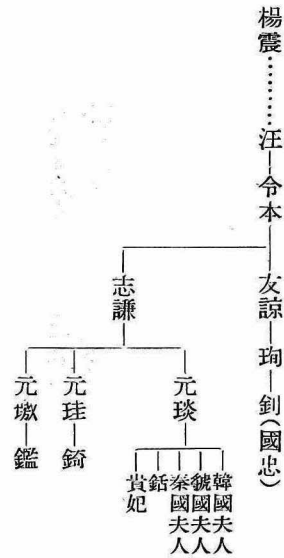
祖先は相當名門であつたらうが、彼自身は餘り大した人物でもなく、不幸、列傳に載せられる様な業績もなかつたらしく、彼女が玉の輿に載つてから、纔かに其の名を知られた程である。それが貴妃傳に基いて想像した元琰である。

ところが新舊唐書ともに、列傳中に楊元琰傳なるものが見えてゐる。(唐書二二〇卷、舊唐書一三五卷)此の元琰も凡そ前者と同時代の人であり、出身地もよく似てゐた。即ち前者の宏農華陰に對し、後者は魏州閔郷

(河南省靈寶縣)であり、河南陝西の省界を挟んで、互に接近した地である。又唐書宰相世系表によれば、前者の先祖は後漢延光年間太尉に上つた楊震であり、後者の先祖も前記元琰傳には、同じく楊震としてゐる。

而して元琰傳の元琰は開元六年に歿してゐて、恰度貴妃の誕生の前年に當つてゐるから、貴妃が生れた頃には既に此の世になく、彼女が幼にして孤兒となつたといふことを出生當時にまで遡らせると、一寸暗合するやうにも思はれる。そこで同時代に同一の先祖を有する同姓同名の者が、近接した土地に住んでゐたことになる。然るに此の兩元琰は、貴妃傳の元琰が前記の如く蜀州司戶參軍で終つてゐるに反し、元琰傳の元琰は太子賓客となつた程の人物であり、大分隔たりがある。その家族に關しても、元琰傳には子忠昌を記してゐるが、勿論貴妃の事は見えず、一方貴妃傳では元琰の子は銛となつてゐて、此處にも相違を發見する。また元琰傳の元琰が開元六年に歿したときは、七十九歳の高齡であつたから、彼女が出生したといふことも常識的に考へてやゝ不合理である。そこで此の兩者は別人と考へておく方が穩當な様に思はれる。

楊氏系圖(唐書宰相世系表)



貴妃の兄姉の順位は詳かでない。此處には並列したに過ぎない。

元來楊氏は周室より出で、子孫分れて華陰に繁榮したのであつて、玄宗の皇后楊氏(元獻皇后)も、同じく華州華陰の人である。(唐書后妃傳)。唐書宰相世系表には楊氏は宰相十一人も出だし、相當な家柄であつたらしいから、元琰傳の元琰の様な良吏傳に加へられてゐる人物も現れたのであらう。

上述の様に貴妃の父元琰は、元琰傳の元琰と異なるとする、新舊唐書の貴妃傳や楊國忠傳などによつて知るより方法はない。彼は志謙の子であつて、元珪・元璠と共に三人兄弟であつたが、蜀に在任中に死亡し

たので、彼女は叔父元璠の許に養はれることになつた。そして父のなくなつた家は、彼女の從祖兄に當る釗(後の國忠)によつて支へられてゐたのである。(楊國忠傳)叔父の許に育つた彼女は、その恵まれた美貌のお蔭で年長じて壽王邸に入り、やがて開元二十三年十二月に、十七歳を以て壽王妃に冊立せられた。その後、開元二十五年十二月に玄宗の最も寵愛した武惠妃が歿し、これに代るべき人を索めたが、二十八年十月に壽王邸より玉環を召出して、道觀に入れ、天寶三載十二月に改めて宮中に召して、翌年貴妃となしたのであり、それ以後は周知の通りである。

さて彼女が元琰の女であることに就いては、異説がある一つは元來は元璠の長女であるが、玄宗が彼女を壽王邸より召出したときに、元璠の子としておくのは少しく都合が悪いので、天下の耳目を掩はんが爲めに、元琰の女としたといふ説である。⑥かうなると、彼女は元琰、元璠、兩人のどちらの實子であるか判らなくなる。實際曖昧な生れ方である。

次ぎは、全然別個の説であつて、明の鄭露の赤雅卷中、楊妃井の項には

楊妃并最冷冽。飲之美姿容。下多香草。在容州雲凌里。妃姓楊一本無姓名玉奴。別一本無字玉環。號太真。母葉氏懷一本無懷孕十二月而生。都督部書楊求爲女。才貌夔絕。楊元琰爲長史。以勢求之。攜至京師。選入壽邸。時年十四。

とあつて、頗る興味ある事實を記載してゐる。赤雅は鄜露の廣西地方兒聞記であるから、當時此の地方にかゝる傳説が残されてゐたといふことが知られる。これによると、彼女は元琰や元璣の實子でなく、廣西省の片田舎に生れたものであつて、天恵の美貌と才智のために、轉々として貰はれて行つたことになる。明の朗瑛の七修類稿卷二十六楊貴妃考にも同様の事柄を擧げてゐる。此の説によると、楊元琰が生存中に彼女を長安まで伴つて來たといふことになり、蜀で歿したといふ正史の記載と合はず、又貴妃は元琰の養女といふこととなつて、此處にも亦正史と矛盾を生じて來るから直ちには採用するを得ない。

然らば、一體貴妃の素性は如何なるものであらうか。前述の兩説を綜合して考へて見ると、恐らく彼女は無名の人の子であり、元琰や元璣の生んだ子ではなかつ

たらう。それではその出生地は何處であらうか。これに就いては、彼女が蜀で誕生したといふこと、元琰が蜀州の司戶參軍として在任中に生れたといふことが重要である。すなはち此の事實は、彼女が元琰の實子でないとしても、少くとも四川省或るひはそれに近い地方で生れたことを想像させる。四川には楊妃池とか落妃池と名付ける池が父元琰の任地であつた蜀州すなはち崇慶縣と左程隔たりない灌縣附近に在つて、貴妃の出生地として古くから傳へられてゐる。これらの池は赤雅の井戸と同様に、傳説的價值しか認められず、これを以て直ちにその出生地と斷定することは冒險ではあるが、何か暗示を與へるものでないだらうか。通常傳へられる如く、彼女が蜀や南海の荔茭を好んだ逸話も、その南方生れを想像せしむるよすがに數へられないだらうか。また彼女が豐滿な肉體の所有者であつたことは、「太真姿質豐豔」(舊唐書貴妃傳)とか、嘗て玄宗の愛妃の梅妃江氏と争つた時に、梅妃に「肥婢」と罵られたこと(唐の曹鄴梅妃傳)などより推して知られる。白樂天の長恨歌では

春寒賜浴華清池。溫泉水滑洗凝脂。

とまで謳はれてゐる程に、豊麗で皮膚が透き通つて白かつたことが窺はれる。この事實は、唐代に南支地方の婦女が「越婢肥肉淨、奚僮眉眼明。」（元氏長慶集卷二十三、估客樂）と稱せられたのに照らして、彼女が南方生れなりとする臆測を一層強固ならしむるものである^④。兎も角も彼女は所謂中國人らしからぬ者であつたに違ひない。外國文化に憧れた唐代に在つて、殊にその心酔の甚しかつた玄宗に寵愛され、また一般人士の憧憬の的となり、親しまれたのは當然であらう^⑤。

然らば、此の南方生れの女が、如何にしてはる／＼長安の都へ這入つて來たか。その経路に至つては、赤雅に彫露が傳へてゐる様な明確なことは判らぬが、才色兼備の乙女を草深い廣西の田舎に埋もれさせておくのは惜しいと考へて、誰かゞ都に連れて來たのであらう。都では楊元璿の屋敷に育てられたかもしれない。また壽王の邸宅に置かれてゐたかもしれない。壽王邸に居たとすると、いつしか壽王瑁の眼鏡に適つて、妃に冊立せられんとしたところ、身分賤しき無名の者の子では差支へがあるので、假りに河南府士曹參軍の元璿の長女として興入れしたのであらう。これは想像で

あるから、間違つてゐるかもしれないが、何れにしても、開元二十三年十二月に壽王妃に冊立せられた際には、楊元璿の長女であつたことは、全唐文卷三十八冊壽王楊妃文の玄宗の詔で慥かである^⑩。此の元璿については、元琰と同じく、貴妃傳・國忠傳宰相世系表などによる外、詳しく知ることが出来ない。元琰の弟であり、たゞ河南府士曹參軍であつて、後に國子司業に上つた（唐書宰相世系表）位しか傳はらぬ。

彼女が楊元璿の長女であるとして、何故に元琰の女とされてゐるのであらうか。これは前に一説として紹介した如く、壽王妃であつたことを隠蔽せんとした苦肉の策であつたと思はれる。元璿の女として、一旦我が子壽王の妃に迎へたものを、いくら天子でも自分の後宮に入れることは、流石に憚つたのであらう。此の工作は玄宗やその取り巻きの策士の仕業に違ひない。玄宗は壽王妃たる彼女を己が掌中に收める手段として道教に假託して、彼女に則天武后の冥福を祈るべく道觀に這入れと勅してゐる^⑪。そこで彼女は女道士となり、名も太眞と改められた。そして世間のほとぼりが冷めた後、天寶三載十二月に始めて宮中に入れ、代りに壽

王には韋昭訓の女を嫁せしめた。此の様に世間態を顧慮したのであるから、彼女が元璩の女であることは當然隠さねばならなかつた。貴妃に冊立された後、元璩以下一族が多く高位高官を贈られた際にも、獨り元璩の名が漏れてゐるのは(貴妃傳)、此の間の消息を物語つてゐるのではあるまいか。かくして元璩なる人物が借りて來られたのであらう。

然らば當時元璩なる人物は果して實在してゐたであらうか。此の點については最後に言及する積りであるが、暫くは正史に従つて元璩の兄として實在したと考へておかう。それではかゝる隱蔽工作のなされてゐた頃には生存してゐたかどうかといへば、恐らく既に故人となつてゐたであらうし、また故人であればこそかゝる捏造が試みられたのであらうと思はれる。貴妃が幼にして孤兒となつたと記されてゐる譯である。

貴妃の家系が曖昧であることは、舊唐書貴妃傳では銛を再從兄としてゐるが國忠傳では兄としてゐるし又國忠の場合でも、天寶十二載にその父珣を顯揚して建てた恒農先賢積慶之碑では貴妃の從兄となつてゐるが、正史では從祖兄となつてゐる。これに關して、金石錄

卷二十七、唐武部尙書楊珣碑では趙明誠は國忠を志謙の孫なりとし、碑文を肯定してゐるが、十七史商榷卷八十六、楊貴妃國忠世系では、王鳴盛は碑文を否定してゐる。また天寶年間に、榮華を競ひ、玄宗の行幸に扈從するときは、每家一隊をなし、一隊毎に異つた色の衣をつけて、百花煥發の如しとしてその絢爛な有様を謳はれた所謂楊氏の五家合隊(太真外傳國忠傳)なども、楊氏の中何人をこれに加ふべきか判然としないのであつて、趙翼も陔餘叢考卷二十、楊氏五家合隊では、その異同を論じて

然則五家者。其始則銛錡韓毓秦也。其後則錡與國忠及韓毓秦也。

と逃げてゐる。

以上元璩を中心とする楊氏一家の家系について考へると、可成りの相違が各説に在ることが知られる。殊に元璩父子には種々の疑問が生じて來る。そこで元璩といふ人物が果して現實に存在してゐてゐたかどうか再び検討されねばならない。若し元璩が假空の人物であつたとすれば、何處から斯かる人物を拉し來つたのであらうか。此處に筆者の極めて奔放な想像を許して

戴くならば、此の元琰は、全く假空の元琰を創作したのではなくて、彼の正史に見える元琰傳の元琰に紛らはして作られたのではなからうか。さう考へると、開元六年に死亡した元琰を父として、貴妃が幼少にして父を失つたといふことも頷かれ、又同時代に殆んど同地方に同姓同名の人物が存在したといふ不可解な事柄も氷解されるであらう。而も此の元琰傳の元琰が、「多鬚類胡」(舊唐書元琰傳)とあるやうに、頗る中國人離れをした風貌を有してゐたことを知るとき、貴妃が同様に中國人らしからぬ容姿であつたことを想ひ合はせて、其處に何者か一脈の相通するものがあるのでないかと思はれる。^①正史や外傳に見える家系の異同は、恐らく彼女の爲めの僞父捏造工作の不手際を曝露した結果であらう。

貴妃並びにその家系に就いては、尙論すべき點も多々あり、以上は單なる臆測であるから、誤りも甚しいかもしれぬが、詳しくは後日改めて論じたいと思ふ。

註

① 貴妃は太真外傳や明皇雜錄によれば、字玉環となつてゐるが、本文引用の明の鄭露の赤雅では、名は玉奴と記してゐる。

る。玉環と名付けたことについては唐の元虚子の龍威秘書楊太真説には

楊太真生而有玉環在其左臂。環上有墳起太真二小字。故少名玉環。(清の胡鳳丹馬嵬志所載)

とあり、頗る興味あるその由來を傳へてゐるが、太真が道觀に入つた後の呼び名であるから、此の傳説は疑はしい。又明の朗瑛の七修類稿卷二十六、楊妃小字では唐の狄歸昌や李商隱の詩を引用して、阿蠻とか阿環とか愛稱されたことを傳へてゐる。

② 蒲州府志卷三には、元琰の居を構へた蒲州獨頭村を、貴妃入内の後に、楊妃村と呼んだと傳へてゐる。

③ 元琰は貴妃が玄宗の寵を受ける様になつてから、太尉齊國公を贈られてゐる。(舊唐書貴妃傳)また太真外傳には册妃の日に濟陰太守を、更に後に兵部尙書を贈つたとある。

④ 楊氏は周室より出たと傳へられてゐるが、その祖先に關しては諸説あり、元和姓纂卷五では

周武王第三子唐叔虞之後。至晉出公。遜於齊。生伯僑歸周。天子封爲楊侯。子孫以國氏。一云周宣王曾孫封楊。爲晉所滅。其後爲氏焉。或曰周景王之後。楊雄自叙曰。伯僑不知周何別也。

とあつて、武王、宣王何れの出か不明であり、唐書宰相世系表には、周の宣王の子尙父、或は晉の武公の子伯僑を以て祖となしてゐる。また天寶十二載八月十六日、勅命により恒農扶風縣に建てられた楊國忠の父珣彰德の碑たる□□武部尙書鄭國公碑銘には(金石粹編卷八十九)、楊氏の先を

のべて

珣華陰人也。叔虞翳圭。自周封晉。伯喬食菜。受邑君楊氏族之先也。

とあり、楊氏の伯喬より出でしを傳へてゐる。但し右碑は恒農先賢積慶之碑と額書されてゐる。

- ⑤ 註一に引用した赤雅には、年十四にして壽邸に入り、此の時玄宗彼女を召見して西王母の服色を賜つたとある。尤も赤雅の記載を直ちに信憑することが出来ないが、美貌と才智の彼女が、若くしてかゝる後宮に召出されたことは當然であらう。

- ⑥ 清の朱彝尊や吳省欽の説であつて、彝尊は曝書亭集の書楊妃本元敬長女。大書冊壽王妃父。乃天寶四載。立爲貴妃。妃本元敬長女。而籍其口。遂令妃不父其父。而移作元琰少女。

といひ、又吳省欽は白華前集の涪州貢荔支辨に於て貴妃乃河南府士曹參軍楊元敬長女。受勅爲壽王妃。既入宮禁。帝欲愚天下之耳目。詭爲元敬兄元琰少女。

といつてゐる。

- ⑦ 太真傳にある落妃池については本文参照。また大清一統志卷二百九十二成都府には

楊妃池 在灌縣。東方輿地勝覽。在導江縣。楊元琰爲蜀州司戶。生貴妃。嘗誤墜此池。縣志。池在縣東十里。とある。

- ⑧ 越婢とは當時如何なる者に對しての名稱であるか詳かでは

ないが、越は江南地方を指すこと疑ひなく、古來此の地より嶺南にかけて印度支那人種の住居してゐたのであるから、斯かる異質のものは、恐らく支那人種以外の者であらうと思はれる。

- ⑨ 唐書五行志には

天寶初。貴族及士民。好爲胡服胡帽。婦人則簪步搖釵。衿袖窄小。

とあり、唐代玄宗朝の外國文化心酔の一例を掲げてゐる。玄宗については、明皇雜錄その他には、霓裳羽衣曲とか羯鼓の如き外國音樂を愛好したことを記してゐるが（那波博士唐宋時代の旗亭酒樓、歴史と地理第十八卷第四號）、これも其の外國文化陶酔の一つとして數へるべきであらう。

- ⑩ 全唐文卷三十八、冊壽王楊妃文。

維開元二十三年歲次乙亥。十二月壬子朔。二十四日乙亥。皇帝若曰。於戲樹屏崇化。必正闡閭。紀德協規。允資懿哲。爾河南府士曹參軍楊元敬長女。公輔之門。（下略）

- ⑪ 註六参照。舊唐書貴妃傳では、彼女が嘗て壽王妃であつたことを記載してゐるが、唐書貴妃傳では、これを缺いてゐる。壽王妃といふ點に就いては、古來隱秘せんとする説もあつたに相違ない。

- ⑫ 全唐文卷三十五、度壽王妃爲女道士勅

聖人用心。方悟眞宰。婦女勤道。自昔罕聞。壽王瑁妃楊氏。素以端懿。作嬪藩國。雖居榮貴。每在精修。屬太后忌辰。永懷追福。以茲求度。雅志難違用。敦宏道之風。特遂申衷之請。宜度爲女道士。

⑬ 資治通鑑卷二百十五、玄宗紀天寶四載八月壬寅の條には、此の日本眞を冊して貴妃となし、元琰に兵部尙書を贈り、元珪を以て光祿卿に、銛を殿中尙書に、銛を駙馬都尉に爲したと見えてゐるが、何故か元琰の名は見出し得ない。此の點洵に不可解である。

⑭ 銛と貴妃との關係は、舊唐書貴妃傳には再從兄としてあるが、他の親族に較べてより密接な間柄であつたらしく、天寶五載七月に、貴妃が玄宗の機嫌を損じて、宿下りを命ぜられた時には、銛の宅へ送り届けられてゐる。(貴妃傳)銛は恐らく貴妃の親代りの地位にあつたのであらう。而して再從兄とすれば、銛は何人の子に當るか、貴妃傳には記されてゐず、不明である。舊唐書國忠傳や唐書では常に銛を貴妃の兄としてゐるのは、前掲系圖によつて知られるところであつて、銛についても疑問が多い。

碑銘の通り珣の父を志謙とすれば、元琰も亦志謙の子であるから、珣の子國忠と元琰の女貴妃とは當然從兄妹の間柄となる。

⑮ 金石錄卷二十七、唐武部尙書楊珣碑には、趙明誠は右唐楊珣碑。案唐史宰相世系表。楊珣爲友諒。子。今碑乃云志謙子。疑史誤珣楊國忠父也。故玄宗親爲製碑。其末盛稱國忠之美云。

といひ、又金石粹編卷八十九所載の扶風縣志では、同様に碑文を肯定し、史を否定し、史が珣と元琰と誤つたことを指摘して、金石文の世に亡びざる功を稱へて

貴妃傳言。詔爲元琰(琰)立宗廟。帝自書其碑。此因帝有

題碑之事。曠代作史。誤珣爲元琰。不曾親察此碑爾。此史之誤于紀事也。嗚呼金石之文。不泯於世豈淺鮮哉。と言つてゐる。

⑯ 十七史商榷卷八十六の同所では、貴妃と國忠の世系の新舊唐書に於ける異同を論じ、碑の誤謬を考證して

蓋國忠當日倚恃威晚。以作威福。引而近之。冒稱與妃同祖。玄宗蔽惑。爲其父製碑。遂據其所稱者書之耳。(中略)恐碑辭皆不足信也。趙明誠信碑疑史。殊屬不確。と結論してゐる。

⑰ 貴妃が中國人らしからぬ體質であつたことに關しては、開元天寶遺事に彼女が紅い汗を流したことを傳へて

貴妃每至夏月。裳衣輕綃。使侍兒交扇鼓風。猶不解其熱。每有汗出紅膩而多香。或之於巾帕上。其色如桃紅也。

とあり、汗の色を異にし、且つ特別の香ひを有してゐたことが知られるが、彼女は此の様な異臭を有してゐたので、常に瑞龍腦香を入れた錦の囊を懷中してゐた。(西陽雜俎)紅汗に類するものとして、開元天寶遺事には、彼女が思石を承けて參内する時、父母と別れを惜んだ際に、天寒うして涙が凍つて紅氷となつたと記されてゐる。これは恐らく美人の歎きを形容した語であるかもしれないが、紅汗の方はたゞ形容のみとは一寸考へられぬ。